

俳句雑誌



20周年記念号

空

令和4年10月29日発行

第20巻1号

通巻第103号



2022・10

SORA 103号

白露

柴田佐知子

巢立ちたる鳥が留まる一羽呼ぶ

母老いて鞠のごと坐す夏夕べ

熊蟬や木々に消されし蔵の影

子育てに縁なく廻す白日傘

緑蔭や片脚で鶏考ふる

金欄の男を盛りて祭舟

船渡御や川の形に人の波

祭の子紅をさすときおとなしき

鬼百合に崖の力の集まれり

脱走のエミューに揺るる夏野かな

遠雷や国を壊して壊されて

白露にこの世のすべて収まりぬ



福岡 高倉 和子

東京 中田 みなみ

春泥の重さ楽しむ故郷かな

木ぶし垂れ煙り始めし雑木林

時折は土をほぐして種を蒔く

春寒を穂高の駅に惜しみけり

思ひ出すことを諦め桜餅

囀や個室にチョコが一粒つつ

鯉の口集まる橋や花曇り

捻子巻きて玩具を返す春の昼

膝頭光る縁側花の昼

糊利きしシャツ送り出す麦の秋

遠足の列だらだらと止まりけり

忘れものと母追つてくる麦の秋

張り切つて山を越えたる鯉幟

浮き足となる綿菅の風のなか

初夏や力の限り泣く赤子

綿菅とぶ夢の続きのやうに飛ぶ

長崎 荒井 千佐代

埼玉 服部 早苗

春北風や男が船を飛び移り

夕映えと記し閉ぢたる初日記

沈みつつ帯ほどけゆく流し雛

手鏡の向かうの背中着ぶくれて

復活祭蠟涙かたく弥撒の果つ

豆撒や渡り廊下に鬼の面

チューリップ鏡見ずとも老い定か

節分会駄菓子袋も撒かれけり

春装となるマネキンの四肢ばらばら

雛納め風通しおく天袋

これよりは大灘の風鶴引けり

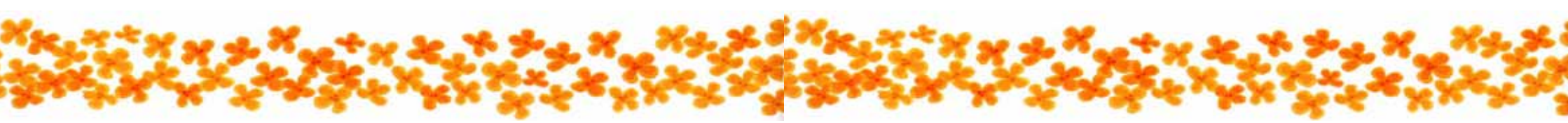
児童書の形いろいろ春の虹

蛸路地にプロパンガスや紫木蓮

揺り椅子の罨にはまりて春眠し

引鶴仰ぐハライソを見るごとく

算盤は四級のまま卒業す



北九州 深川淑枝

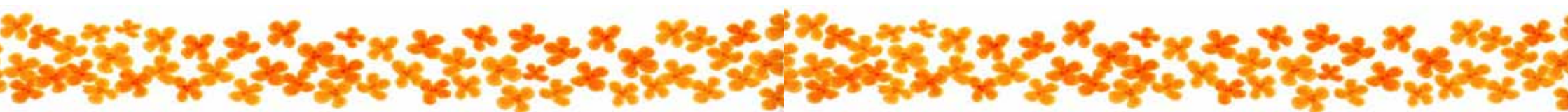
きさらぎの遠景に船浮いてをり
日の的となりたる一樹鳥の恋
野に低く初蝶はまだ濡れてゐる
骨量の減りたる軽るさ青き踏む
夕蛙誰にも遠く鳴きにけり
雲走りどの木も濡れて春の山
かしづかぬわきまへぬ赤椿咲く
寝流れの椿来し方ふりむかず

広島 戸栗末廣

いかのぼり海かたむけて上りけり
箱出でて雛の唇かしこまる
水音の近くに生れ紋白蝶
逆さまに蕾ついでばむ春の鳥
春の鳶ひかりの円を描きつつ
野に遊ぶ黄色き声は空に消え
明け方の空の湿りや鳥帰る
道に出て今年の燕迎へけり

福岡 角野良生

幼児の手を引きゆくは雪女
去年今年ページ一枚捲るかに
鏡餅儼曼陀羅となりにけり
埋み火は埋み火のまま尉と化す
寒鯉の深きところを回りけり
凍滝の有無を言はせぬ容なり
冬の波海に押されて崩れけり
密命を帯びしか冬のごきかぶり



* 田 宮 井 知 英

粕 屋 吉 田 菫

臥して見る木々のそよぎも花の世も

田水張るうしろは雲の離宮かな

落ちてなほ姿正しき紅椿

落蟬の頭支点に回り出す

囀や産着にあつる手アイロン

縄文の顔に入れ墨日雷

一ひらの落つや芍薬総崩れ

牛蛙人間くさき記紀の神

パンドラの箱は身の内夏怒濤

外輪山の切れ目大きく天の川

北 州 坂 口 学

岡 垣 田 中 と し 江

荒灘へせり出す崖に鴉の巢

野を焼きてドリーネの底おそろしき

根が掴む石ごと若布引き上ぐる

野ねずみを穴に隠して猛る野火

若布竿根元を刈るに定まらず

明王の火焰のごとし阿蘇を焼く

磯につく螺髪のやうな鹿尾菜刈る

末黒野や飛び立つ鳥の一番

菜の花に海人族の墳溺れをり

末黒野に牛の幅なる牛の道

熊 本 松 田 明 子

直 方 石 橋 幾 代

川風の吹き込んでくる植木市

暗きより出す種芋に芽のすこし

一千種一万本の植木市

やはらかきぺんぺん草を鶏小屋へ

受付に立たされてゐる紙雛

白南風や砂にまみるる地引網

紙雛風に凭れて倒れけり

また傷を増やし逃げ去る恋の猫

かんばせを御簾に隠して御所雛

綿菓子に触れももいろの春の風

福 岡 永 淵 恵 子

北 州 河 原 敬 子

風葬の島をま下に鳥帰る

平飼ひにはとりの艶梅二月

植木市試し打ちして鋏を買ふ

春炉見ゆる猟師小屋より話し声

それぞれの一首を残し卒業す

豆の花支柱の笹はまだ青し

千体の揃ふ雛の間恐ろしき

竹筒を添へて菜の花頂きぬ

手枕の仮寝のごとし涅槃像

せせらぎの音のなかなる土筆摘む



長崎

松尾龍之介

セーターの裏を返して脱ぎ得たり
 三月の雲に真珠の影ひなた
 冴え返る木の瘤に木の堪え性
 畳屋に春の夕べのタタミ屑
 春の鳶真似て両手をひろげたり

北九州

兒玉充代

鳥の名の列車すぎゆく桜東風
 だんだらの町より見ゆる春の海
 剪定の鋏の音に迷ひなし
 くづるといふ朝空を春の鳶
 山鴉峙にしづむおぼろかな

大宰府

西住三恵子

ねむごろに絵馬に重ぬる受験絵馬
 下萌や膝に来る児を抱き上ぐる
 都府楼の虻にひろぐる花筵
 新樹よりささやき程の葉擦かな
 本筋のずれし返信あたたかし

千葉

原友子

まんさくの花のくすくす笑ひかな
 嘯りや堆肥鋤きたる土の色
 くれなゐの繭の中なる朝寝かな
 口笛を吹くやうに咲くクロツカス
 誰待つとなく道に出て春隣

大野城

森田明成

神木を振り乱したる春一番
 白魚や言葉少なに躍り食ひ
 観潮船翼のごとく波蹴立て
 遠山をさらに押し遣る黄沙かな
 丹念な鳥の水浴び山笑ふ

広島

星加鷹彦

雪解や小屋眠らせし釘を抜く
 春眠の夢の中でもまた眠り
 大根の首のあたりが好きで揺る
 菜の花が筑紫次郎を甘やかす
 分校のこれが最後に卒業歌

神奈川

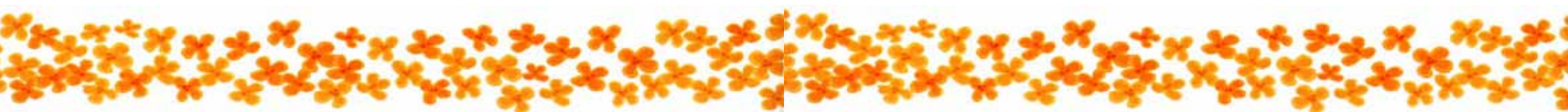
窪みち子

まんさくや歯抜け童子のよく笑ふ
 愉しげにまんさく縮れ空青し
 陽の色となる連翹の垣根かな
 花すもも語らぬままに逝きし父
 来る人も無き明け暮れや花八つ手

長崎

仲里奈央

冬萌やどんな日々にも子の笑顔
 ふつくらと胸のふくらみ雛祭
 まだ誰も知らぬ唇桃の花
 沈丁花もう会ふことはなければ
 恋猫の熱き視線にたぢろげり



兵庫 大西 乃子

大宰府 山本 則男

いくつなら天寿と言へる春の雷
蛇出でて空き家に舌を使ひをり
ぼんぼりの灯のやはらかき雛あられ
老木の瘤を撫でゐる桜守
電話機を置きたる後の春愁

一山の膨れてゐたる鳥の恋
揚雲雀力を抜かぬ高さあり
春風や日のあるうちは畑にゐる
ゆきずりの蝶一頭のががやける
パイロットの姪
あたたかや忘るることを増やしつつ

兵庫 岡村 尚子

春日 三井所美智子

行く春の沖へ沖へと漁の水脈
春浅の芝に来てゐる番鳥
二つ三つ投げてはつまみ年の豆
青空へとんで大きな石鹼玉
春夕焼猫のか細き骨拾ふ

花あんず友の落ち着くケアハウス
校門まで桜に包まれて歩く
卒寿なる老人会長山笑ふ
にいちゃんと同じ大学入学す
お祝ひは幾ら包もか春炬燵

東京 山田 正子

兵庫 青木 朋子

ドロップ缶振るやからから春淋し
窓拭いて春満月の整ひぬ
春の虹未だに探す四つ葉かな
卒業す返事きれいな子に育ち
花冷えや座布団薄き屋形船

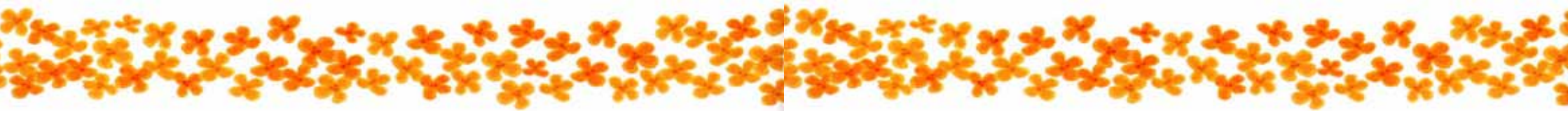
ぬひぐるみの全身ぬぐふ春の昼
春の夜の猫にしてやる腕枕
卒業式終へし教師のがらんどろ
春場所のピンクの廻し応援す
停戦の報待つ日々や花ミモザ

福岡 あさなが捷

北海道 押田裕見子

遠雷や橋脚の反る壇ノ浦
億年の吐息昇りて天の川
放生会くじで大きなカルメ焼
大鳥居より入りゆく紅葉山
父の眉また思ひ出すとろろ汁

湯ざめてふ言訳に飲むコップ酒
唇に憑いて尽きたる雪婆
スカートのゆるき結び目春兆す
淡雪や忍び足にて寺の猫
草色の司書のエプロン春隣



兵庫 えとう樹里

鷹の巢に鷹の戻るを待つてをり
公園の鷺の巢団地にぎはへり
潮風にまじり鮎子炊くにほひ
息を切らし渡してくるる土筆かな
初蝶の黄色白色つづいて来

直方 曾根富久恵

春菜届く火山灰の注意書も添へ
雛の間を抜けたる母の忌の僧侶
茎立ちぬトタンの堀に囲まれて
灯りたる人家へ傾ぐ山桜
包丁を使はぬ一日紙風船

福岡 秋津令

雪吊を城主のごとく眺めけり
みな丸き顔となりたる春炬燵
去年の巢を繕つてゐる燕かな
軒下のしづまつてゐる抱卵季
影曳いて長くなりたる遍路杖

大阪 田岡千章

豆を打つ鬼の渾名はギリシア語
春立つや耳朵の産毛を金色に
磨き上げ鏡の中に寒戻る
春寒のほんに底意地悪しきかな
懇ろにバレンタインの爪手入れ

兵庫 林徹也

山城の石積み焦がす山火かな
夜遊びの猫のもどりし雛の間
半分は母に供ふるよもぎ餅
肘高く受くる米寿の卒業証
蛇出でて四方の天敵窺へり

東京 今井康子

蜜豆や銀座の柳芽吹き初む
地球儀はおほかた青し日脚伸び
地表より噴き出でしごと雪柳
民宿を曲るや午後の春の海
摘草や摘むたびに子が名をたづね

直方 吉田悦子

父ははの馴れ初めを聞く紫木蓮
聞かぬふり知らぬふりして牛蒡時く
工場のラジオ体操山笑ふ
ランドセルに動物図鑑春うらら
啓蟄やフレイル防ぐ靴を買ふ

大阪 井上和子

藻畳に足乱れたる彼岸かな
軒下に蛸壺二百涅槃西風
赤き実を吞む吐く捨つる春の禽
物種の艶のひしめくガラス瓶
表札の文字のうするる竜の玉

北九州 横田敬子

連なりてバイク疾走花菜風
野遊びの子に草の名を教へけり
姿見せぬ土竜の起こす春の土
神の田の売地となりぬ鳥雲に
有り難き平和な暮し土筆摘む

兵庫 岩井京子

窓は黄となる隣人のミモザ咲き
枝に挿すみかんに目白二羽三羽
春先に出窓の蘭の開き初む
それぞれに色咲き揃ふ春の蘭
つむじ風に巻き込まれたる春落葉

